

原著<論文>

幼稚園児の母親の育児感情と抑うつ

—子育て支援利用との関係—

安藤 智子* 荒牧美佐子** 岩藤 裕美***
 丹羽さかの**** 砂上 史子***** 掘越 紀香*****

Mothers' Feelings about Child-Rearing and Depressive Symptoms:
 Focusing on the Use of Child-Rearing Support in Kindergartens

Satoko Ando, Misako Aramaki, Hiromi Iwafuji, Sagano Niwa, Fumiko Sunagami, and Norika Horikoshi

The purpose of this study is to investigate the occurrence of depressive symptoms among kindergarteners' mothers, to examine associations between mothers' feelings about child-rearing and depressive symptoms, to identify associations between such mothers' feelings and depressive symptoms, and to explore the use of extra child-care-hours at kindergartens by mothers. A questionnaire survey conducted in kindergartens revealed that 18.4% of 2,976 non-working mothers showed high scores on depressive symptoms, which is almost the same rate as postpartum depression. The result also revealed a correlation between depressive symptoms and feelings about child-rearing. Mothers with totals indicating higher perceived burdens of child-rearing tended to use extra child-care-hours more frequently and to feel less guilty about their child-rearing methods than mothers having a low perceived sense of child-rearing burdens. We proposed screening and support systems for depressive mothers of kindergarteners.

キーワード：抑うつ，育児感情，子育て支援，預かり保育，幼稚園

depression, feelings about child-rearing, child-care support, extra child-care-hours, kindergartens

1. 問題と目的

乳幼児をもつ母親の育児に対する感情については、牧野の育児不安の研究に始まり、性役割分業¹⁾や父親のサポートとの関係²⁾等研究が積み重ねられてきた。これらの研究の多くは、育児不安などの尺度を予測変数として、その値の

低いことを精神的健康の指標としているが、使用する育児に関する感情の測度は多様である。たとえば、牧野³⁾の、一般的疲労感、一般的気力の低下、いろいろな状態、育児不安兆候、育児意識の低下の特性からなる14項目の尺度、住田・中田⁴⁾の、育児についての不安な感情、子どもの成長・発達に対する不安・自分自身の育

*山脇学園短期大学 発達心理学・臨床心理学

**東京福祉大学 発達心理学

***お茶の水女子大学人間文化研究科 発達心理学・臨床心理学

****お茶の水女子大学人間文化研究科 発達心理学

*****千葉大学 保育学

*****大分大学 保育学・幼児教育学

児能力に対する不安、育児によって生じる欲求不満を測定する17項目の尺度、吉田ら⁵⁾の、育児満足、夫のサポート、育児不安、子どもの育てやすさ、相談相手の有無を含む尺度、川井ら⁶⁾の、育児困難感、夫・父親・家族機能、母親の不安・抑うつ傾向、扱いの難しい子ども、夫の心身の不調など、家族や子どもにも広げた尺度など、育児への感情に関する概念の構成要素は、研究者によって異なる。また、測定された育児への感情と精神的健康の指標との関係については、十分に検討されておらず、SDS (Self Rating Depression Scale) 尺度⁷⁾で測定した抑うつ症状と乳幼児をもつ親の育児関連ストレスとの関係を扱った佐藤ら⁸⁾などに散見するのみである。

女性は、妊娠中から産後1、2カ月は、抑うつになりやすく、10～30%程度存在する⁹⁾。抑うつになると、その症状のために、掃除や洗濯ができなくなったり、食事の献立や買い物を頭の中で整理して考えることが難しくなったりする。養育の面でも、子どもの相手をしようと思っても、身体が動かず、表情がなくなり、目を合わせたり笑いかけたりするやりとりが少なく、表情が否定的で、子どもから引きこもりがちか過剰に侵襲的になる¹⁰⁾など、不適切な養育と抑うつとの関係が指摘されている。日本では、平成12年11月に児童虐待の防止等に関する法律が制定されてから平成15年6月までの間の虐待による死亡割合は、乳児が38%と高く、そのうち、4カ月未満児が5割であったことから、妊娠中の産科における抑うつスクリーニングや、保健師による4カ月までの家庭訪問事業がなされている。その際に、エジンバラ産後うつ病自己質問票 (Edinburgh Postnatal Depression Scale ; 以下 EPDS と約す)¹¹⁾ (表1) を用いた、抑うつを発見、介入の取り組みが広がっている。

幼稚園においても、「親と子の育ちの場」としての役割が期待され、預かり保育や子育て相談などの子育て支援事業がなされている。筆者らは、幼稚園への3回の調査と1回のインタ

表1 エジンバラ産後うつ病自己質問票

- 1) 笑うことができるし、物事のおもしろい面もなかった r
- 2) 物事を楽しみにして待った r
- 3) 物事が悪くいったとき、自分を不必要に責めた
- 4) はっきりした理由もないのに不安になったり、心配した
- 5) はっきりした理由もないのに恐怖に襲われた
- 6) することがたくさんあって大変だった
- 7) 不幸せなので、眠りにくかった
- 8) 悲しくなったり、惨めになった
- 9) 不幸せなので、泣けてきた
- 10) 自分自身を傷つけるという考えが浮かんできた

過去7日間に感じたことを答えてもらう
rは逆転項目

ビュー調査を行い、育児への負担感と預かり保育については荒牧ら¹²⁾が、子育て相談と精神的な健康との関係については岩藤ら¹³⁾が報告している。本研究では、抑うつと育児感情の研究をつなげ、乳幼児をもつ母親の精神的な健康についての知見を広げるために、以下の目的を設定した。第1に、幼稚園児をもつ母親を対象に、どの程度の割合で抑うつが認められるかを検討する。第2に、幼児を養育している母親の育児感情と抑うつとの関係について検討する。第3に、幼稚園における子育て支援の利用と抑うつや育児感情の関係を明らかにする。

II. 方法

1. 調査方法

全国複数地域の幼稚園へ「幼稚園における子育て支援に関する調査」の調査を依頼し、同意を得た幼稚園へ郵送法による質問紙調査を行った。同様の手続きで2004年2～3月、2005年2～3月、2006年7～9月の3回にわたる横断的な調査を行った。本研究は第3回の保護者調査を分析対象とする。

2. 調査対象

あらかじめ調査を依頼し承諾を得ていた複数地域の47幼稚園へ、保護者への質問紙配布・回

収を依頼した。育児感情は、母親の就労との関係があることが指摘されているため、回答者が家事専従の母親である2,976名を分析対象とした。

3. 使用尺度

(1) 育児感情尺度 住田・中田¹⁴⁾の育児不安尺度を元に作成した計21項目を用い4件法(4. よくある～1. まったくない)でたずねた。最尤法プロマックス回転による因子分析を行い、因子負荷量の小さかった2項目を除き、再度同様の手順で因子分析を行い、4因子が抽出された。同じ住田・中田の育児不安尺度を異なった対象で因子分析した荒牧ら¹⁵⁾の因子分析結果と同様の下位尺度に分かれたので、因子名は荒牧らにならぬ「育児への負担感」(7項目, クロンバックの $\alpha = .82$)「育児への不安感」(4項目, クロンバックの $\alpha = .82$)「育ちへの不安感」(4項目, クロンバックの $\alpha = .82$)「育児への肯定感」(4項目, クロンバックの $\alpha = .73$)とし計19項目を用いた。

(2) 抑うつ尺度 EPDSの日本語版を用いた(クロンバックの $\alpha = .83$)。9点以上を抑うつとしてスクリーニングする。EPDSは、周産期の抑うつをスクリーニングするために開発されたが、質問内容は産後に特定のではなく、他の時期や領域でも使用が可能であるとされている¹⁶⁾。

(3) 自尊感情 Rosenbergの自尊感情尺度の邦訳版¹⁷⁾を10項目のうち、第2回調査データの因子分析により、因子負荷量の大きかった4項目「少なくとも人並みには価値のある人間である」「何かにつけて自分は役に立たない人間だと思う」「だいたいにおいて自分に満足している」「自分はまったくダメな人間だと思うことがよくある」を5件法(5. あてはまる～1. あてはまらない)でたずねた(クロンバックの $\alpha = .83$)。

(4) 夫婦関係親密度 Marital Love 尺度¹⁸⁾から、「どんなことがあっても夫の味方でいたい」「夫を一人の人間として深く尊敬している」「夫は魅力的な男性だと思う」「夫と一緒にいると夫を本当に愛していると実感する」の4項目を5

件法(5. あてはまる～1. あてはまらない)でたずねた(クロンバックの $\alpha = .90$)。

(5) ソーシャルサポート いざというときに子どもを預ける対象を「幼稚園での預かり保育」「配偶者」「自分の親」「配偶者の親」「自分のきょうだい」「友達」「民間の託児所」「近所の人」「地域の子育て支援サービス」「その他」の10項目から、子育てについて相談する対象を「カウンセラーなどの専門家」「配偶者」「自分の親」「配偶者の親」「自分のきょうだい」「友達」「近所の人」「地域の子育て支援サービス」「その他」の9項目からそれぞれ複数選択してもらい、合計数を得点とした。

(6) 子育て支援の利用に関する項目 幼稚園における子育て支援の利用についてたずねた。

(7) フェイスシート：家族形態、子どもの数、就労形態などをたずねた。

なお、統計処理には、SPSS (windows 版) 11.5 J を使用した。

III. 結果

1. 対象者の概要

母親の年齢は、31～35歳1,284名(43.3%)、父親の年齢は36～40歳1,089名(36.7%)が一番多く、家族形態は、核家族2,531名(83.0%)、拡大家族312名(10.7%)、その他78名(12.6%)であった。所属園は、私立園1,934名(65.0%)、公立園708名(23.8%)、国立大学附属園148名(5.0%)、不明186名(6.3%)であった。幼稚園に通っている子どもの性別は男児1,535名(51.8%)、女児1,426名(47.9%)で、対象児の年齢の平均は4.3歳、きょうだい数は、きょうだいなし645名(21.7%)、2人1,776名(59.7%)、3人495名(16.6%)、4人60名(2.0%)であった。

2. 抑うつの割合

EPDSが9点を越えた割合は18.4%であった。また、平均値は5.7(SD = 3.5)であった。同じEPDSを用いた調査では、抑うつの割合が、

表2 抑うつと育児感情の下位尺度の階層的重回帰結果

	育児への負担感			育て方への不安感			育ちへの不安感			育児への肯定感		
	β	R^2	ΔR^2	β	R^2	ΔR^2	β	R^2	ΔR^2	β	R^2	ΔR^2
1 子どもの属性		.01***	.01***		.02***	.02***		.03***	.03***		.00	.00
性別 ^a	.02			-.02			-.13***			-.03		
きょうだい数	.12***			.01			-.08**			.04		
出生順位	-.02			-.11***			.01			-.04		
2 ソーシャルサポート		.09***	.09***		.04***	.02***		.03***	.01***		.09***	.09***
家族形態 ^b	-.05**			.00			.02			.01		
預けサポート	-.06**			.03			-.01			.00		
相談サポート	-.03			.02			.05**			.09***		
夫婦関係	-.10***			.08***			.00			.13***		
3 パーソナリティー		.20***	.09***		.23***	.20***		.11***	.08***		.16***	.07***
自尊感情	.02			-.22***			-.11***			.18***		
4 抑うつ		.26***	.07***		.30***	.06***		.13***	.02***		.16***	.01***
EPDS	.17***			.15***			.05*			.00		
5 育児感情		.43***	.18***		.46***	.20***		.20***	.07***		.22***	.06***
育児への負担感				.39***			.08**			-.27***		
育て方への不安感	.41***						.27***			-.02		
育ちへの不安感	.05**			.18***						.00		
育児への肯定感	-.20***			-.01			-.01					

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$ β 値は最終ステップ(第5モデル)での値

a: 0: 男児 1: 女児

b: 0: 核家族 1: 拡大家族

妊娠期は29%, 産後5週22%, 産後6か月で15%であった¹⁹⁾ことから, 幼児期の子どもをもつ家事専従母親にも, 妊娠中や産後と同様に高い割合で抑うつが存在することが示された。

3. 育児不安と抑うつの関係

(1) 相関分析 EPDSと育児への負担感($r = .44$, $p < .01$), 育て方への不安感($r = .45$, $p < .01$)には, 有意な中程度の相関が, 育ちへの不安感($r = .27$, $p < .01$), 育児への肯定感($r = -.27$, $p < .01$)は弱いながら有意な相関が認められた。抑うつと育児への否定的な感情との間の相関が高いことが示された。

(2) 育児感情に関する要因の検討 育児感情尺度の下位尺度である「育児への負担感」「育て方への不安感」「育ちへの不安感」「育児への肯定感」それぞれを従属変数として, 階層的重回帰分析を行った。第1ステップでは, 子どもの属性(子どもの性別, きょうだい数, 出生順位)

を, 第2ステップでは, ソーシャルサポート(家族形態, 預けソーシャルサポート, 相談ソーシャルサポート, 夫婦関係)を, 第3ステップとして, パーソナリティー要因(自尊感情)を, 第4ステップとして抑うつ(EPDS)を, 第5ステップとして育児感情(育児への負担感, 育て方への不安感, 育ちへの不安感, 育児への肯定感)の下位尺度を投入した(表2)。ただし, 第5ステップでは, 従属変数となった下位尺度は予測変数からはずした。

分析の結果, 4つの分析すべてにおいて, 第2ステップ以降の決定係数の上昇は有意であった。まず, 抑うつは, 育児への肯定感をのぞく, 否定的な育児感情すべてに有意な寄与をしていた。「育児への負担感」には, 子どもの数が多いこと, 家族形態が核家族であること, 預けソーシャルサポートが少なく, 夫婦関係がよくないこと, 抑うつ, 育て方・育ちへの不安感, 肯定的感情が有意な寄与を有していた。「育て方への

不安感」へは、子どもの出生順位が早いこと、夫婦関係のよさや自尊感情の低さ、抑うつ、育児への負担感、育ちへの不安感が高いことが寄与していた。「育ちへの不安感」へは、子どもの性別が男児であること、きょうだい数が少ないこと、相談サポートが多く、自尊感情が低いこと、抑うつ、育児への負担感・育て方への不安感が高いことが寄与していた。「育児への肯定感」は、相談サポートが多いこと、夫婦関係がよいこと、自尊感情が高いこと、育児への負担感が少ないことが寄与していた。

4. 幼稚園の預かり保育と子育て相談の利用者の特徴

預かり保育の利用者と子育て相談の利用者の特徴を明らかにするために、ロジスティック回帰分析を行った(表3)。預かり保育の利用には、子どもの出生順位が後で、預けソーシャルサポートが多く、相談ソーシャルサポートが少なく、育児への負担感が高いことが寄与していた。子育て相談の利用には、預けソーシャルサポートが多く、抑うつや育て方への不安感、育ちへの不安感が高く、育児への負担感が低いことが寄与していた。

表3 預かり保育と子育て相談の利用者の特徴

	預かり保育利用		子育て相談利用	
	β	オッズ比	β	オッズ比
性別 ^a	.03	1.03	-.15	.86
きょうだい数	-.07	.94	-.03	.97
出生順位	.58***	1.79	.05	1.05
家族形態 ^b	.00	1.00	.05	1.06
預けソーシャルサポート	.27***	1.32	.07*	1.07
相談ソーシャルサポート	-.14***	.87	-.02	.98
夫婦関係	.01	1.01	.02	1.02
自尊感情	.02	1.02	.03	1.03
抑うつ	-.01	.99	.05***	1.05
育児への負担感	.03*	1.03	-.04***	.96
育て方への不安感	.01	1.01	.13***	1.14
育ちへの不安感	.03	1.03	.09***	1.09
育児への肯定感	-.02	.98	.04	1.04

* $p < .05$, *** $p < .001$

a : 0 : 男児 1 : 女児

b : 0 : 核家族 1 : 拡大家族

5. 幼稚園の子育て支援の利用と育児感情・抑うつとの関係

抑うつ・育児感情と子育て支援の利用について検討するために、育児感情の4つの下位尺度を平均値から1標準偏差以上高い者を高群、低い者を低群とし、それぞれ、幼稚園における子育て支援である預かり保育と子育て相談の利用とかけ合わせて、カイ二乗検定を行った。抑うつ群のEPDSは区分点で2群に分け、抑うつ群と非抑うつ群とした。その結果、預かり保育の利用経験で有意差が認められたのは育児への負担感で、($\chi^2(2) = 12.46, p < .01$)、残差分析により、預かり保育の利用経験は、負担感の高群に有意に多く、利用経験や利用希望なしは、育児への負担感低群に多かった(表4)。他の変数で

表4 育児への負担感と預かり保育利用のカイ二乗検定結果

		利用経験あり	利用希望あり	利用経験・希望なし	合計
育児への負担感高群	度数	263	127	104	494
	割合	53.24	25.71	21.05	
	調整済み残差	2.47	.69	-3.49	
育児への負担感低群	度数	254	133	170	557
	割合	45.60	23.88	30.52	
	調整済み残差	-2.47	-.69	3.49	
合計	度数	517	260	274	1051
	割合	49.19	24.74	26.07	100

は、預かり保育の利用について、有意な差は認められなかった。次に、子育て相談の利用について有意な差が認められたのは、抑うつ ($\chi^2(3) = 12.85, p < .01$)、育て方への不安感 ($\chi^2(3) = 77.31, p < .001$)、育ちへの不安感 ($\chi^2(3) = 65.99, p < .001$)、育児への肯定感 ($\chi^2(3) = 23.69, p < .001$)であった(表5)。残差分析により、抑うつ群と非抑うつ群を比較して「時々相談する」は、抑うつ群が有意に多く、「必要があれば相談したい」は、非抑うつ群が有意に多かった。育て方への不安感と育ちへの不安感は、「よく相談する」、「時々相談する」は不安感高群が、「必要があれば相談したい」、「相

表5 抑うつ・育児感情と子育て相談利用のカイ二乗検定結果

			よく相談する	時々相談する	必要があれば 相談したい	相談しようと 思わない	合計
抑うつ	抑うつ群	度数(割合)	22(4.22)	280(53.74)	196(37.62)	23(4.41)	521
		調整済み残差	.89	3.22	-3.41	-.39	
	非抑うつ群	度数(割合)	78(3.42)	1048(45.92)	1046(45.84)	110(4.82)	2282
		調整済み残差	-.89	-3.22	3.41	.39	
	合計	度数(割合)	100(3.57)	1328(47.38)	1242(44.31)	133(4.74)	2803
育て方への不安感	高群	度数(割合)	53(5.09)	563(54.08)	388(37.27)	37(3.55)	1041
		調整済み残差	3.04	7.04	-6.12	-4.71	
	低群	度数(割合)	12(2.03)	213(35.98)	313(52.87)	54(9.12)	592
		調整済み残差	-3.04	-7.04	6.12	4.71	
	合計	度数(割合)	65(3.98)	776(47.52)	701(42.93)	91(5.57)	1633
育ちへの不安感	高群	度数(割合)	44(11.37)	231(59.69)	98(25.32)	14(3.62)	387
		調整済み残差	4.13	5.55	-6.62	-2.74	
	低群	度数(割合)	17(3.85)	178(40.36)	210(47.62)	36(8.16)	441
		調整済み残差	-4.13	-5.55	6.62	2.74	
	合計	度数(割合)	61(7.37)	409(49.40)	308(37.20)	50(6.04)	828
育児への肯定感	高群	度数(割合)	36(5.01)	347(48.26)	311(43.25)	25(3.28)	719
		調整済み残差	2.06	.47	.78	-4.50	
	低群	度数(割合)	7(2.22)	147(46.67)	128(40.63)	33(10.48)	315
		調整済み残差	-2.06	-.47	-.78	4.50	
	合計	度数(割合)	43(4.16)	494(47.48)	439(42.46)	58(5.61)	1034

「相談しようと思わない」は不安感低群が有意に多かった。育児への肯定感は、「よく相談する」は高群が有意に多く、「相談しようと思わない」は低群が有意に多かった。抑うつ群や育て方への不安感・育ちへの不安感・育児への肯定感の高群が、相談を利用する傾向が認められた。一方、預かり保育の利用が多かった育児への負担感の高群は、相談の利用に有意な差は認められなかった。

6. 預かり保育を利用した感想の比較

預かり保育を利用した感想を、抑うつ群と非抑うつ群、育児感情の高群と低群で比較する t 検定を行った(表6)。その結果、抑うつ群が非

抑うつ群よりも、また、育児感情の4つの下位尺度の高群が低群に比べてより「自分がイライラすることが減った」としていた。また、育児への負担感の高群は、低群に比して、「ニーズにあった時間帯である」「預かり保育の内容に満足している」「預かり保育で何が良かったか情報が十分に得られている」「子どもが活動を楽しんでいる」「子どもの成長や発達によい影響がみられる」といった、預かり保育の内容に関する満足度は有意に低かった。抑うつ群が非抑うつ群に比して、また、育て方の不安感や育ちへの不安感の高群が低群と比して、「親の都合を優先して子どもがかわいそうな気がする」と感じていた。

幼稚園児の母親の育児感情と抑うつ

表6 預かり保育を利用した感想のt検定による比較結果

	抑うつ			育児への負担感			育て方への不安感			育ちへの不安感			育児への肯定感		
	抑うつ群	非抑うつ群	t値	高群	低群	t値	高群	低群	t値	高群	低群	t値	高群	低群	t値
ニーズに合った時間帯である	3.49	3.67	-3.62***	3.60	3.75	-2.76**	3.62	3.71	-2.10	3.63	3.63	-.05	3.78	3.56	3.43**
安心して預けられる	3.80	3.81	-.38	3.78	3.82	-.84	3.83	3.83	.04	3.84	3.81	.55	3.88	3.75	2.52*
預かり保育の内容に満足している	3.33	3.49	-3.19**	3.37	3.54	-2.69**	3.43	3.48	-.82	3.49	3.48	.18	3.58	3.36	3.26**
預かり保育で何があったか情報が十分に得られている	2.55	2.66	-1.54	2.50	2.83	-3.87***	2.54	2.77	-2.89**	2.64	2.63	.11	2.81	2.46	3.59***
子どもが活動を楽しんでいる	3.44	3.51	-1.42	3.47	3.62	-2.69**	3.50	3.54	-.88	3.52	3.57	-.61	3.66	3.41	3.75***
子どもの成長や発達により影響がみられる	3.08	3.14	-1.03	3.05	3.22	-2.52*	3.11	3.13	-.21	3.19	3.08	1.23	3.30	2.81	6.26***
自分がイライラすることが減った	2.87	2.71	2.33*	2.93	2.54	4.27***	2.82	2.46	4.58***	2.85	2.52	2.98**	2.79	2.53	2.45*
家事や自分のことなどに取り組む時間に余裕ができた	2.97	2.98	-.16	3.05	2.93	1.34	3.00	2.88	1.58	3.12	2.85	2.57*	3.16	2.72	4.40***
子どもとの付き合い方を見直せるようになった	2.55	2.46	1.35	2.54	2.40	1.66	2.56	2.27	3.85***	2.68	2.19	4.51***	2.57	2.19	4.00***
親の都合を優先して子どもがかわいそうな気がする	2.03	1.88	2.48*	2.00	1.85	1.82	1.99	1.77	3.00**	2.04	1.76	2.85**	1.19	1.90	.12

両側検定：* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

IV. 考 察

1. 幼稚園児をもつ家事専従の母親の抑うつ

幼稚園児の家事専従の母親で、EPDSの区分点を越えた割合は18.4%、平均値は5.7であり、抑うつになる人の割合が高いとされていた周産期と同様に、高い割合であった。早期発見と介入等の取り組みがなされている周産期と変わらない割合で、幼稚園児をもつ家事専従の母親の抑うつが認められたことから、この時期の母親の抑うつに対する取り組みの必要性が明らかになった。それには、まず、幼稚園児や母親とかわる関係者が、抑うつの特性を理解することが必要である。子どもへの対応がうまくいっていないようにみえたり、元気がないようにみえる母親の中に、抑うつが認められる可能性があると考え、抑うつである場合、家庭での教育する力の向上のために、必要と考えて行った子どもへの関わり方のアドバイスや指導が、母親の抑うつ気分を悪化させ、その結果子どものせいで怒られたというように、養育に否定的な影響を与える可能性もある。抑うつが母親を支え、子どもへの適切な関わりを教諭が

行うことで、母親の養育を補完することができるという認識も必要となろう。さらに、巡回相談などで、臨床心理士などの発達や心理の専門家によるサポートの必要性が示唆されたといえる。そして、幼稚園から専門機関への紹介や、母親を支えている児童館やその他の施設の担当者との連携を行うという視点も重要であろう。

2. 抑うつと育児感情の関連

抑うつは、育児感情の下位尺度と有意な相関があり、また、育児への肯定感を除く育児感情に有意な寄与を有していた。この結果のみで、抑うつが育児感情へ影響すると言うには慎重でなければならないが、育児への負担感、育て方への不安感、育ちへの不安感など、育児にまつわる否定的な感情と抑うつには関係がある可能性が示唆された。産後1年までの間については、母親の抑うつと子どもへの感情、養育態度が、相互に影響しあう関係が認められている²⁰⁾。つまり抑うつが子どもへの否定感に影響し、養育態度も否定的になり、否定的な養育態度をとることが、抑うつ影響するという双方向の影響が指摘されている。幼児をもつ母親の抑うつと育

児感情の影響関係については、縦断的な研究を行う必要があり、今後の課題である。

育児感情の下位尺度間には、寄与する要因に違いが認められた。まず、育児への負担感や育ちへの不安感にはきょうだい数が寄与していた。きょうだい数が増えることで、実際の育児にかかる手間は増え、また、子ども同士の関係を扱う必要も生じ、母親の負担感は強くなると考えられる。一方、1人育てた経験から、育ちへの不安感は、きょうだいが増えると減少するのではないだろうか。また、子どもの性別は、男児であることが育て方への不安感に寄与していた。男児であることが、気質として扱いづらい子どもであることと関係し、育ちへの不安感が増加しているとも推測される。この、育児への負担感へのきょうだい数が多いことの寄与、育て方への不安に男児であることの寄与は、保育園児の母親等働く母親も含めた対象での分析においても認められており²¹⁾、母親の就労の有無と関係なく、幼児をもつ母親の一般的な結果であると考えられる。

子どもが2人目の母親は、育児の経験があるから育ちへの不安感は減るが、子育ての負担は増えている。預かり保育の利用にも、出生順位が後であることが寄与していたことから、子どもが2人目の母親に対して、子育て経験者ではあるが、育児への負担感が大きいという点で目を向ける必要がある。

3. 子育て支援の利用と抑うつ・育児感情について

家事専従の母親のうち、育児への負担感の高群は、預かり保育の利用が多いが、預け先はあまり多くもっていなかった。預かり保育の内容や子どもへの影響の評価は低群に比して肯定的ではないが、子どもを預けることへの抵抗は低群との差がなく、イライラは解消されていると評価していた。一方、相談の利用は負担感の低群と有意な差はなく、ロジスティック回帰分析では、負担感が低いことが相談の利用に寄与していたことから、相談の利用は積極的ではない

ことが推測される。これらの特徴からは、幼稚園で指摘される、教諭の気になる親なのに、親から育児の相談はなく、預かり保育の利用に抵抗がないようで、預かることが親の支援になっているのかどうか不安になるといわれる母親に、この負担感の高い人が含まれていると推測できる。育児への負担感の高い母親の預かり保育や子育て相談の利用について、どのように考えることができるだろうか。

育児への負担感の質問内容は、「自分の子どもでもかわいくないと感じる」「子どもがわずらわしくてイライラする」など子どもに対する否定感が含まれている。預かり保育を利用することで、子どもと過ごす時間が減り、母親の子どもに対する否定的な感情を減らしている可能性がある。離れていることで安定し、子どもと一緒に過ごす時間を穏やかに過ごすことにつながれば、預かり保育が家族を支えていると考えることもできる。育児への負担感の高群は、低群よりも、預かり保育の子どもへの影響ではなく自分のイライラの減少を高く評価している。

子どもについての相談が少ないのが育児への負担感高群の特徴だが、子どもを好きと思い、関心をもつことができなければ、発達や子どもの幼稚園での生活に興味をもつこともできず、相談をすることができないだろう。子育てへの肯定感の高群が低群より頻繁に相談を利用していることから裏づけられる。子どもへの評価が低く、先生から問題を指摘されることが心配で、話をすることを避けるということもある。相談につなげるためには、安心して子どものことを話すことができるよう、親の子どもの理解を尊重する肯定的な声かけが有効ではないだろうか。母親が安心していられる環境を提供することで、母親が幼稚園という場や教諭に安心し、相談にもつながると考えられる。

また、荒牧らの分析では、パートタイマーの母親には、預かり保育の利用の有無で、育児の負担感に有意な差が認められず、預かり保育利用の理由は、家事専従の場合、授業参観などの

一時的な用事が多く、パートタイマーの利用理由である仕事のためとは異なっていた²²⁾。そのため、家事専従の母親は、育児の負担が高く、預かりを利用せざるを得ない人が利用していると考察されている。この分析もあわせて考えると、負担感の高い人が預けるのは、一時的な利用であり、罪悪感の生じる利用理由ではなく、また、負担感が減るだけの支援につながっていないとも推測される。育児の負担感の高群や、預かり保育の利用について、頻度を加え、縦断調査とするなどの更なる検討により、どのような支援が育児の負担感の軽減につながるのかを明らかにすることは今後の課題である。

抑うつが高いことや、育て方・育ちへの不安感の高いことは相談の利用に寄与していた。預かり保育の利用については、抑うつ群や、育て方への不安感高群、育ちへの不安感高群も、「自分がイライラすることが減った」とした割合が低群よりも高かった。育て方への不安感高群、育ちへの不安感高群は、低群に比して「子どもとの付き合い方を見直せた」との回答が有意に高く、預かり保育がこれらの母親の精神的な安定や余裕への効果があり、そのことから、子どもとの付き合い方を見直すことができたと推測される。一方、「親の都合を優先して子どもがかわいそうな気がする」とした割合も、抑うつ群、育て方・育ちへの不安感高群が低群に比して強く感じていた。これらの群は、預けるとイライラが解消されるが、子どもがかわいそうというアンビバレントな気持ちで預かり保育を利用していることが推測される。子どもを育てる責任は親にあるので、他の人に預ける罪悪感はあるという見方もできるだろう。しかし、今後、預かり保育はどのようなねらいでどのような内容を実施するかが練られ、示されることで、親の用事で子どもを預けているというだけでなく、子どもへの教育的、発達の意義や教育課程との関係が共有されていくことで、預けることへの不要な罪悪感を減らすことにつながることも考えられる。

引用文献

- (1)牧野カツコ (1982) 乳幼児をもつ母親の生活と〈育児不安〉. 家庭教育研究所紀要 3. 34-56
- (2)住田正樹・中田周作 (1998) 父親の育児態度と母親の育児不安. 九州大学大学院教育学研究紀要 2. 19-98
- (3)前掲(1)
- (4)前掲(2)
- (5)吉田弘道・山中龍宏・巷野悟郎・太田百合子・中村孝・山口規容子・牛島廣治 (1999) 育児不安スクリーニング尺度の作成に関する研究: 1・2 か月児の母親用思索モデルの検討. 58. 697-704
- (6)川井尚・庄司順・千賀悠子・加藤博仁・中村敬・安藤朗子・谷口和加子・佐藤紀子・恒次欽也 (2000) チーム研究 6 育児不安に関する臨床的研究Ⅳ 子ども総研式育児支援質問紙(試案)の臨床的有用性に関する研究 36. 117-138
- (7)Zung, W. W. K. (1965) A self-rating depression scale. Archives of General Psychiatry 12. 63-70
- (8)佐藤達哉・菅原ますみ・戸田まり・島悟・北村俊則 (1994) 育児に関連するストレスとその抑うつ重症度との関連. 心理学研究 64. 409-416
- (9)岡野禎治・村田真理子・増地聡子・玉木領司・野村純一・宮岡等・北村俊則 (1996) 日本版エジンバラ産後うつ病自己評価表(EPDS)の信頼性と妥当性. 精神科診断学 7. 525-533
- (10)Kaplan, P. S., Bachorowski, J., & Zarkelbi-Striyse, P. (1999) Child-directed speech produced by mothers with symptoms of depression fails to promote associative learning in 4-month old infants, Child Development, 70, 560-570.
- (11)Cox, J. L., Holden, J. M., & Sagovsky, R. (1987) Detection of postnatal depression: Development of the Edinburgh Postnatal Depres-

- sion Scale, *British Journal of Psychiatry*, 150, 782-786.
- (12) 荒牧美佐子・安藤智子・岩藤裕美・丹羽さかの・堀越紀香・無藤隆 (2007) 幼稚園における預かり保育の利用者の特徴：育児への負担感との関連を視野に入れて. *保育学研究* 45. 69-77
- (13) 岩藤裕美・立石陽子・安藤智子・荒牧美佐子・丹羽さかの・砂上史子・堀越紀香・無藤隆 (2007) 幼稚園における子育て支援：幼稚園における「子育て相談」の形態と保護者の精神的健康との関連から. *お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター紀要* 4. 27-34
- (14) 前掲(2)
- (15) 荒牧美佐子・無藤隆 (2008) 育児への負担感・不安感・肯定感とその関連要因の違い：未就学児を持つ母親を対象に *発達心理学研究* 19. 87-97
- (16) Thrope, K. (1993) A study of the use of the Edinburgh postnatal depression scale with parent groups outside the postpartum period, *Journal of Reproductive and Infant Psychology*, 11, 119-125.
- (17) 山本真理子・松井豊・山成由紀子 (1982) 認知された自己の諸側面の構造. *教育心理学研究* 30. 64-68
- (18) 菅原ますみ・詫摩紀子 (1997) 夫婦間の親密性の評価：自記入式夫婦関係尺度について. *季刊 精神科診断学* 8. 155-166
- (19) 安藤智子 (2007) 妊娠期から産後1年までの母親の抑うつに関する要因：縦断的研究. *お茶の水女子大学学位論文*
- (20) 同上
- (21) 前掲(15)
- (22) 前掲(12)

謝辞

本調査にご協力くださった幼稚園の先生方、保護者の皆様に深謝いたします。また本調査の機会をつくり、ご指導くださった白梅学園大学無藤隆先生に感謝いたします。

付記

本論文の一部は乳幼児教育学会第4回大会において発表した。

本論文は、文部科学省科研費基盤研究（B）15330140の助成を受けた。